

小狐狸买手套

新美南吉

(翻译 李轶伦)

北方的寒冬，也来到了狐狸妈妈和孩子居住的森林。

一天早上，小狐狸正要从洞里爬出来，突然大叫一声，捂着眼睛跌跌撞撞地跑到了妈妈那里。小狐狸着急地喊着：

“妈妈！什么东西扎着眼睛了！快帮我拔出来！快！快！”

狐狸妈妈大吃一惊，连忙小心翼翼地拿开小狐狸的手一看，眼睛并没有被什么东西扎到。妈妈从洞口出来后才知是怎么一回事。昨天夜里下了一场大雪，阳光照在白雪上反射着耀眼的光芒。

从来没见过雪的小狐狸头一次被这么亮的反射光晃了眼，还以为是被什么东西扎到眼睛了呢。

小狐狸出去玩儿了。他在像丝绵一样柔软的白雪上奔跑，雪粉像水花飞溅起来一样，在阳光的照射下映出一道道小小的彩虹。

突然，随着一阵“啪嗒啪嗒！哗——！”的响声，面包屑一样的雪花铺天盖地的向小狐狸压来，吓得小狐狸连滚带爬地窜了十多米。回头一看，却什么都没有。原来是雪从杉树枝上崩落下来了。长长的雪条还在不断地从树枝间落下来。

玩了好一阵子，小狐狸回到了洞里。他把冻得通红的湿乎乎的小手高高地举起来，对妈妈说：

“妈妈，手好冷，都冻麻了。”

妈妈往小狐狸冰凉的小手上哈了一口热气，用自己柔暖的双手握起小手，说：

“马上就暖和了。摸了雪的手很快就会暖起来的。”

妈妈一边说一边想：可别把宝贝的小手冻坏了。晚上得去城里给

宝贝买一副合适的毛线手套回来。

漆黑的夜幕像一块大包袱布一样，要将整个原野和森林包个严实。可是，雪太白，无论怎么包还是会透出亮光来。

母子俩从洞口爬了出来。小狐狸藏在妈妈的身下，边走边眨着大眼睛好奇地东张西望。

走了不久，前方出现了一盏明灯。小狐狸说：

“妈妈你看，那么低的地方落着一颗星星！”

“那可不是星星。”

妈妈突然停下了脚步。

“那是城里的灯光。”

看到那盏灯的时候，妈妈突然想起有一次和朋友进城时的遭遇。那个朋友说什么也不听她的劝阻，偏要去偷人家的鸭子，结果被农民发现，落荒而逃，总算捡了一条命。

“妈妈怎么了？我们快走啊！”妈妈身下的小狐狸催促着。可是，妈妈却无论如何也不敢再往前走了。实在没有办法了，妈妈便决定让孩子自己去城里买手套。

“好孩子，伸出一只手来。”妈妈说。她把小狐狸伸出的手握在自己的掌心中，一转眼，竟变成了一只可爱的小孩子的手。小狐狸惊讶得不得了，把这只手张开又握起，捏一捏再闻一闻味儿。

“妈妈，好奇怪呀！怎么变成这样了？”小狐狸借着雪光，不可思议地盯着这只手问妈妈。

“妈妈把它变成人的手了。你仔细听妈妈说：城里有很多人家，进了城要先找到一间挂着礼帽招牌的房子。找到以后就敲门，还要记得说晚上好哦！门开了就把这只手——记住！——是这只人的手伸到门缝里，说你要买一副这么大的手套。知道了吗？可千万别伸错了手哦！”妈妈语重心长地嘱咐道。

“可为什么要这样做呢？”小狐狸不解地问。

“人家要是知道你是狐狸，就不会把手套卖给你了。还会把你抓起来关进笼子里呢！人类最可怕了！”妈妈回答。

“是真的吗？”

“当然了！绝对不能把你的手伸进去哦！一定要伸人手哦！”妈妈一再吩咐，并把两个铜钱塞在了人手中。

于是，小狐狸深一脚浅一脚地朝着亮着灯的地方出发了。雪光映照的原野在他的脚下越来越远，渐渐地，灯光由开始的一盏变成两盏、三盏、直到十盏。小狐狸看着这些灯光想：原来灯和星星一样，也有很多种颜色啊！红色、黄色、蓝色……真好看！不久，他来到了城里，可天已经晚了，家家户户都关上了门，只有暖暖的灯光从窗中透出，洒在街道的积雪上。

不过，门外的招牌上大都还亮着小灯泡，小狐狸一边看一边找帽子店。各种各样的招牌有很多，有自行车招牌、眼镜的招牌；有的招牌是新漆的，有的招牌已经很旧，油漆像旧墙壁似的剥落着。而头一次进城的小狐狸，压根儿就不明白这都是些什么东西。

终于，小狐狸找到了帽子店。正如妈妈路上所说，那是在蓝色灯光的照射下，一个画着大大的黑色礼帽的招牌。

小狐狸照妈妈教的敲了敲门，说了一声：

“晚上好！”

屋子里响起一阵动静之后，门吱呀一声开了一道缝，一条长长的灯光洒在门外的雪地上。

尽管来之前妈妈千叮咛，万嘱咐，可这时小狐狸被灯光晃得慌乱起来，竟然错把自己的手伸了进去，说：

“我买一副这么大的手套。”

卖帽子的人一看是狐狸的手，心想：这只小狐狸，一定是拿树叶当钱来买手套了。就说：

“请先付钱。”

小狐狸乖乖地拿出了握在手里的两个铜钱。店里的人把铜钱放在食指上掂了掂，发出了叮叮的声音，这才知道小狐狸是真的用钱来买手套的，就从柜子里拿出了一副小孩子戴的毛线手套，放到了他的手中。小狐狸道了谢，就顺着来时的路回去了。

“妈妈说人很可怕，可一点儿也不可怕呀？他们看到了我的手，可什么事也没发生啊？”小狐狸决定想看个究竟，人到底是什么样子的。

当他走过一家人的窗前，正好听到里面的声音。那声音多么温柔多么甜美：

“宝宝睡，宝宝睡，
躺在妈妈的怀抱里。
宝宝睡，宝宝睡，
枕在妈妈的胳膊上……”

小狐狸心想，这一定是小孩的妈妈在唱摇篮曲。因为每当小狐狸困了的时候，狐狸妈妈也是用这样温柔慈祥的声音摇着他睡觉的。

这时，屋子里又传出了孩子的声音：“妈妈，天这么冷，树林里的小狐狸会不会冻得直哭啊？”

妈妈的声音：

“不会的。小狐狸也一定在洞里听着妈妈的歌，要睡着了。宝宝也快睡吧！宝宝和小狐狸，谁先睡着呢？一定是宝宝先睡着！”

小狐狸一听，突然着急起来，想赶快回到妈妈的身边去，就急忙蹦蹦跳跳地向妈妈等待的地方跑回去了。

狐狸妈妈也正在焦急地等着小狐狸回来，她担心得身体都开始发抖了。看到平安回来的宝贝，妈妈高兴得把小狐狸紧紧拥在自己暖暖的怀中，眼泪都快流出来了。

母子二人走在回森林的路上。月亮出来了，月光照在他们身上，

泛出一片银白，脚下是深蓝的倒影。

“妈妈，人一点儿都不可怕啊？”

“你怎么知道？”

“其实我把手伸错了。可帽子店的人不但没抓我，还给我这么好的一幅手套呢！真暖和！”

小狐狸蓬蓬地拍了拍戴着手套的双手，有点得意地说。

“什么？！”狐狸妈妈大吃一惊。然后就一直自言自语地说着：

“人真的不可怕吗？人真的不可怕吗？”



（日本語原文） **手袋を買いに** 新美南吉

寒い冬が北方から、狐の親子の棲んでいる森へもやって来ました。

ある朝洞穴から子供の狐が出ようとしてましたが、「あっ」と叫んで眼を抑えながら母さん狐のところへころげて来ました。「母ちゃん、眼に何か刺さった、抜いてちょうだい、早く早く」と言いました。

母さん狐がびっくりして、あわてふためきながら、眼を抑えている子供の手を恐る恐るとりのけて見ましたが、何も刺さってはいませんでした。母さん狐は洞穴の入口から外へ出て始めてわけが解かりました。昨夜のうちに、真白な雪がどっさり降ったのです。その雪の上からお陽さまがキラキラと照していたので、雪は眩しいほど反射していたのです。

雪を知らなかった子供の狐は、あまり強い反射をうけたので、眼に何か刺さったと思ったのです。

子供の狐は遊びに行きました。真綿のように柔かい雪の上を駆け廻ると、雪の粉が、しぶきのように飛び散って小さい虹がずっと映るのでした。

すると突然、うしろで、「どたどた、ざーっ」と物凄い音がして、パン粉のような粉雪が、ふわーっと子狐におっかぶさって来ました。子狐はび

っくりして、雪の中にころがるようにして十米も向こうへ逃げました。何だろうと思ってふり返って見ましたが何もいませんでした。それは樅^{もみ}の枝から雪がなだれ落ちたのでした。まだ枝と枝の間から白い絹糸のように雪がこぼれていました。

間もなく洞穴へ帰って来た子狐は、「お母ちゃん、お手々が冷たい、お手々がちんちんする」と言っ、濡れて牡丹色になった両手を母さん狐の前にさしだしました。母さん狐は、その手に、は一つと息をふっかけて、ぬくとい母さんの手でやんわり包んでやりながら、「もうすぐ暖かくなるよ、雪をさわると、すぐ暖くなもんだよ」といいましたが、かあいい坊やの手に霜焼けができてはかわいそうだから、夜になったら、町まで行って、坊やのお手々にあうような毛糸の手袋を買ってやろうと思いました。

暗い暗い夜が風呂敷のような影をひろげて野原や森を包みにやって来ましたが、雪はあまり白いので、包んでも包んでも白く浮びあがっていました。

親子の銀ぎつねは、ほらあなから出ました。子どものほうは、おかあさんのおなかの下へはいりこんで、そこからまんまるな目をぱちぱちさせながら、あっちやこっちを見ながら歩いていきました。

やがて、ゆくてに、ぽつり、あかりがひとつ、見えはじめました。それを子どものきつねが見つけて、

「母ちゃん、お星さまは、あんな低いところにも落ちてるのねえ」とききました。

「あれはお星さまじゃないのよ」と言っ、その時母さん狐の足はすくんでしまいました。「あれは町の灯^ひなんだよ」

その町の灯を見た時、母さん狐は、ある時町へお友達と出かけて行って、とんだめにあったことを思い出しました。およしなさいっていうのもきかないで、お友達の狐が、ある家の家鴨^{あひる}を盗もうとしたので、お百姓に見つかって、さんざ追いまくられて、命からがら逃げたことでした。

「母ちゃん何してんの、早く行こうよ」と子供の狐がお腹の下から言うのでしたが、母さん狐はどうしても足がすすまないのでした。そこで、しかたがないので、坊やだけを一人で町まで行かせることになりました。

「坊や、お手々を片方お出し」とお母さん狐がいました。その手を、母さん狐はしばらく握っている間に、可愛い人間の子供の手にしてしまいました。坊やの狐はその手をひろげたり握ったり、つねって見たり、嗅いで見たりしました。

「何だか変だな母ちゃん、これなあに？」と言って、雪あかりに、またその、人間の手に変えられてしまった自分の手をしげしげと見つめました。

「それは人間の手よ。いいかい坊や、町へ行ったらね、たくさん人間の家があるからね、まず表に円いシャッポの看板のかかっている家を探すんだよ。それが見つかったらね、トントンと戸を叩いて、今晚はって言うんだよ。そうするとね、中から人間が、すこうし戸をあけるからね、その戸の隙間から、こっちの手、ほらこの人間の手をさし入れてね、この手にちょうどいい手袋ちょうだい、って言うんだよ、わかったね、決して、こっちのお手々を出しちゃ駄目よ」と母さん狐は言いきかせました。

「どうして？」と坊やの狐はききかえしました。

「人間はね、相手が狐だと解ると、手袋を売ってくれないんだよ、それどころか、掴まえて檻の中へ入れちゃうんだよ、人間ってほんとに怖いものなんだよ」

「ふーん」

「決して、こっちの手を出しちゃいけないよ、こっちの方、ほら人間の手の方をさしだすんだよ」と言って、母さんの狐は、持って来た二つの白銅貨を、人間の手の方へ握らせてやりました。

子供の狐は、町の灯を目あてに、雪あかりの野原をよちよちやって行きました。始めのうちは一つきりだった灯が二つになり三つになり、はては十にもふえました。狐の子供はそれを見て、灯には、星と同じように、赤

いのや黄いのや青いのがあるんだなと思いました。やがて町にはいりましたが通りの家々はもうみんな戸を閉めてしまって、高い窓から暖かそうな光が、道の雪の上に落ちているばかりでした。

けれど表の看板の上には大てい小さな電燈がともっていましたので、狐の子は、それを見ながら、帽子屋を探して行きました。自転車の看板や、眼鏡の看板やその他いろんな看板が、あるものは、新しいペンキで画かれ、あるものは、古い壁のようにはげていましたが、町に始めて出て来た子狐にはそれらのものがいったい何であるか分からないのでした。

とうとう帽子屋がみつかりました。お母さんが道々よく教えてくれた、黒い大きなシルクハットの帽子の看板が、青い電燈に照されてかかっていました。

子狐は教えられた通り、トントンと戸を叩きました。

「今晚は」

すると、中では何かことこと音がしていましたがやがて、戸が一寸ほどゴロリとあいて、光の帯が道の白い雪の上に長く伸びました。

子狐はその光がまばゆかったので、めんくらって、ちがった方の手を、——お母さまが出しちゃいけないと言ってよく聞かせた方の手をすきまからさしこんでしまいました。

「このお手々にちょうどいい手袋下さい」

すると帽子屋さんは、おやおやと思いました。狐の手です。狐の手が手袋をくれと言うのです。これはきっと木の葉で買いに来たんだなと思いました。そこで、「先にお金を下さい」と言いました。子狐はすなおに、握って来た白銅貨を二つ帽子屋さんに渡しました。帽子屋さんはそれを人差指のさきにつけて、カチ合せて見ると、チンチンとよい音がしましたので、これは木の葉じゃない、ほんとお金だと思いましたので、棚から子供用の毛糸の手袋をとり出して来て子狐の手に持たせてやりました。子狐は、お礼を言ってまた、もと来た道を帰り始めました。

「お母さんは、人間は恐ろしいものだっておっしゃったがちつとも恐ろしくないや。だって僕の手を見てもどうもしなかったもの」と思いました。けれど子狐はいったい人間なんてどんなものか見たいと思いました。

ある窓の下を通りかかると、人間の声がしていました。何というやさしい、何という美しい、何と言うおっとりした声なのでしょう。

「ねむれ、ねむれ、母の胸に、
ねむれ、ねむれ、母の手に——」

子狐はその唄声は、きっと人間のお母さんの声にちがいないと思えました。だって、子狐が眠る時にも、やっぱり母さん狐は、あんなやさしい声でゆすぶってくれるからです。

するとこんどは、子供の声がしました。

「母ちゃん、こんな寒い夜は、森の子狐は寒い寒いって啼ないてるでしょうね」

すると母さんの声が、

「森の子狐もお母さん狐のお唄をきいて、洞穴の中で眠ろうとしているでしょうね。さあ坊やも早くねんねしなさい。森の子狐と坊やとどっちが早くねんねするか、きっと坊やの方が早くねんねしますよ」

それをきくと子狐は急にお母さんが恋しくなって、お母さん狐の待っている方へ跳んで行きました。

お母さん狐は、心配しながら、坊やの狐の帰って来るのを、今か今かとふるえながら待っていましたので、坊やが来ると、暖かい胸に抱きしめて泣きたいほどよろこびました。

二匹の狐は森の方へ帰って行きました。月が出たので、狐の毛なみが銀色に光り、その足あとには、コバルトの影がたまりました。

「母ちゃん、人間ってちつとも恐かないや」

「どうして？」

「坊、間違えてほんとうのお手々出しちゃったの。でも帽子屋さん、掴まえやしなかったもの。ちゃんとこんないい暖い手袋くれたもの」
と言って手袋のはまった両手をパンパンやってみせました。お母さん狐は、「まあ！」とあきれましたが、「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら」とつぶやきました。

.....
本文テキストは青空文庫（日本ペンクラブ電子文藝館編輯室）よりダウンロードし、歴史的かなづかいを現代かなづかいに改めたものです。